

天の川の捨て子



風宮 凧

天の川の捨て子

きらきら光る天の川に　ぷかぷか浮かぶ小さな瞬き
ずっとずっと　昔のこと
星になり損なった一つの星の子が　川のうねりへと放り捨てられたのでした

天の川の捨て子

彼はぱちりと目を開けると
あっちへざぶざぶ　こっちへざあざあ泳ぎ回り
小さな星や星の欠片をたくさん集めてポケットに詰め込みます

そうしてまた　ぷかぷかと浮かびながら
集めた星達で本の上に星座を次々描きました

彼の描いた小さな星座達は
本の中を元気に飛び回って　時に勢いの余り飛び出してしまったり
不安に耐えきれなくなって　あっという間に壊れてしまったりしました

彼はそのひとつひとつを大きな瞳に焼き付けて
星の記憶を心に記して行きました

ある時　赤くてきらきら光る星に言われました
「お前は星の成り損ないじゃないのか。
どうしてそんなところで呑気にぷかぷかと浮かんでいられるのだ」
「成り損ないでも、星の子だ。ここにいたいから、こうしているんだ」
「はずかしい奴め」
ふんと鼻を鳴らした星は　そのまま遠くへ流れて行ってしまいました

ある時出会った青い星には　こう言われました
「かわいそうに。ああなんて君はかわいそうな成り損ない君だろう。
星になれないのならいっそのこと、塵になって消えてしまった方が幸せなのに」
「塵になんてなってしまったら、星座を作れないじゃないか。
ぼくにはそっちの方が、余程不幸せだ」
「ああ、なんてかわいそう」
さめざめと嘆きながら　星はゆるゆる離れて行きました

いつものようにぷかぷかと浮かんでいると 明るく黄色い星が近付いてきました
「やあやあ君かい！？ 星座をたくさん作っているのは」
小さく瞬き 彼は「そうだよ」と答えます
それを聞いた黄色い星は 嬉しそうに一層輝きました
「やっぱりそうか！ いやいや、ずっと君に御礼が言いたかったんだ！
ありがとう！」
さっぱり訳がわからずに小首を傾げていると 星は笑って言いました
「君が作った星座がね、宇宙を漂って流れてくるんだ。
たくさん、たくさん、色々な色の、色々な形の、星座がね。
僕はそれを見るのが本当に楽しくて、楽しみで！」
その様子があんまり嬉しそうなので 彼もすっかり嬉しくなって
また新しい星座を一つ作り あげることにしました
「僕にくれるのかい？ わあ、ありがとう！」
大事にするよとにこにこ言いながら 黄色い星も去って行きました

ある日 彼は星座を作れなくなりました
美しく輝く破片をつまみ上げても 不思議な形の星を拾っても
彼の本に新しい星座が描かれることはありませんでした

彼はぷかぷか浮かぶことをやめて
ぶくぶくと沈んで行きました

大きな川は静かに彼を取り込んで
揺りかごのように包み ゆらゆらと揺れました

(星になれなかったぼくは、)
(捨てられて、ぷかぷか浮かんで、ぶくぶく沈んで)

(それから どうなるんだろう)

まぶたを閉じると 今まで作ってきたたくさんの星座の瞬きが
星の記憶が きらきらと輝きました

(ぼくは 星に なりたかった)

(本当は、星になりたかった)

(星の子として生まれたからには 星になれなければ意味がないんだ)

(わかってたよ、だって、星になれなかったから ぼくはここに捨てられたんだもの)

(はずかしくて、かわいそう)

確かにその通りだと思ったら 急に悲しくなってしまうて

彼はぼろぼろ泣きました

涙は星とそっくりだったので 天の川の流れてしまい

すぐに区別はつかなくなりました

「君の、一体どこが星じゃないの？」

不意に響いた声は優しくつづけます

「君、目を開いてさ、よく見てごらんよ」

声に促されるように目を開くと 自身の体が輝いています

それは 確かに星の光でした

彼は驚いて瞬きを繰り返しました

「ね？ 君はすっかり星じゃないか。

誰がその輝きを見て、君を星じゃないと言うだろう。

誰が君を指さして、お前は星の成り損ないだと言うだろう。

誰が君の光を見て、はずかしいと、かわいそうだと言うだろう」

「でもどうして。ぼくは、確かに星の成り損ないだったんだ」

「君が目をつぶっていたから――

君自身が、自分は“成り損ないだ”と思っていたからね。

自分のことを成り損ないだと思っている内は、そりゃあ

成り損ない以外の何者にもなれないだろうさ」

声の言う通りでした

いつまで経っても消えない光は 何より彼自身のものでしたが

彼は目をつぶっていたので それに気付かなかったのです

「きれいな光だなあ...うん。すてきな星だ」

「ぼく、これからも、ここにいてもいいのかな」

「うん？」

「だってぼく、捨て子だからここにいたんだ。
なり損ないだったから、ここで星座を作っていたんだ。
今のぼくは、星になってしまった。変わってしまった」

「そうかな」

漂っていた小さな星の欠片たちをそっとすくいあげて
彼はじっと見つめました

「本当に君は変わってしまったと思うのなら、そうかもしれない。
君自身が、ここにいないことができないと思うのなら、そうなんだろうね」

わたしはそうは思わないけれど　という響きは
しんと彼に伝わりました
そうしてさっきのやりとりを思い出して　ああおんなじだと思うのです

決めるのは誰かではなく　自分であると

手の中を見つめながら
自分もまたこの中にあるのだと　彼はしみじみ思いました
手の中に囲った　たくさんの星星の中に

(ぼくはここにいたし、ここにいる)

色も形も大きさも輝き方もまるで違う　「たくさん」の中に

(ぼくは、ぼくとして)
(ここにいる)

捨て子のぼくも
星座を作るぼくも
星として光るぼくも

ぼくは ぼくとして
ここにいるんだ

「あのね、ぼく、決めたよ。
ぼくは、ぼくを、ぼくとして決めた」

「うん」

彼はにこっと笑いました

「ぼくね、今度は――」

おわり

ガラクタ少女

それでもあたしは、
あなたの創る世界が好きだから――

ガラクタ少女

「違うんだよなあ……」

本日何万回目かの溜息。続いて、何かが碎ける様な音。

「悪いけど、それもかたしておいて――」

言われるままにあたしは両手にほうきとちりとりをかっさげて、彼の足もとに散らばったキラキラと光る破片を掻き集めた。小さな破片同士が擦れ合う音は時々美し過ぎる和音を奏でたが、大抵の場合は頭痛の要因になりそうなそれで、普通の人が聞けば間違いなく顔をしかめるのだろう。

「(こんなに きれいなのに)」

大きそうな一つの破片を拾い上げる。光を跳ね返し、虹色に輝く。

しゃがみこんでそれを別の破片にぶつけてみると、ツンと体を突く様な鋭い音が鳴った。

「こら。ガラクタで遊ぶなといつも言ってるだろ」

言い終わるや否や、彼がまた新しい残骸を床へと零し落とす。妖しい色をした破片の粒達が、先のものと同じ色で混じった。

「もう今日はやめだ。僕は寝る」

こういう時は寝るに限るんだと、自分に言い聞かすように呟いて。月と少しの星しかない世界へと、彼は沈んで行く。

「(おやすみも いうま なかった)」

しばらく彼が消えて行った先を眺めてみたが、諦めて、掃除を再開する。

“世界を創る作業”というのは、そんなにも難しいものなのだろうか。

「(よく わからないわ)」

あっという間にちりとりが山の様になった。底の見えないゴミ箱へと全て吸い込ませて、再び回収作業を始める。

「(あっ)」

彼がガラクタと言った山の中に、自分と同じ色を見つけ、思わず拾い上げる。

「(おんなじ)」

中に小さな月が見えた。欠け過ぎてあまりに小さな月だったが、同じ色を持つ自分には感覚的にわかるようである。

――違う。おんなじじゃない。

指先がちりと痛み、欠片はまた、自らガラクタの山の中へと潜りこんで行った。

「(……おこって、た?)」

確かな拒絶。自分にはないはずの「ココロ」というものがなんとなく痛んだ気がしたが、それ

が本当に「心が痛む」という状態なのかを確認する術は、少なくとも今は、ない。そもそもないはずのものが痛むなんてこと、あるのだろうか。

「(.....あとで はかせに きいてみよう)」

自分は少し、変わった存在だから。普通じゃないことが起きても、実際なんら不思議なことはない――博士の口癖が、耳元で勝手に再生された。

二つ目の山をゴミ箱へ放り入れる。

生まれ堕ちるはずだった世界の欠片は。

ゴミ箱の中へと次々に落ちて行く。

美しさと醜さを秘め

調和と歪みの狭間で輝く

その一粒一粒が

息づいていたものが

温度を失くして、死んでいく。

「(やっぱり おんなじだよ)」

あたしだって元々はこの中にいたんだ。博士の気まぐれで、たまたま捨てられずに拾われただけ。いつまたガラクタに戻されても可笑しくない、そんなあやふやな存在。

半分死んでるもの、あたし。

「(あ、また)」

ずきりと痛みを感じた場所を抑えて、小さく息をする。苦しかった。

「(あたし、どこまでこわれてるんだろう)」

視界はぼやけているし、頭はぼうっとして思考がまとまらない。

所詮ガラクタ。

世界の成り損ない。

きまぐれの産物。

そこには なにかがあるの？

目を閉じると暗闇が揺れていた。ゴミ箱の中も、こんな色で揺れているのだろうか。それともまだ息をしている欠片たちが、最期の輝きを持って照らしているのだろうか――

あたしは光る事すらとうに忘れてしまったというのに。

それなら、どうして。

「(どうして、生きたいと思うのだろう――)」

おわり。

ぼっち。

ぼっちはいつも さみしい色をひきずって
とたとた てとてと あるいてく。

(ぼっち、ぼっち)

むかしむかしのぼっちは ぼっちじゃなかった。
ぼっちの名前を呼んでくれるひとが くるくる ふわふわ
ぼっちのやわらかな手をひっぱって ゆらしてくれた。

だからぼっちは きょとんとした目で
ぼっちの意味を考えて、考えて それで
頭がねじきれてしまったんだって。

ぼっちがふわとあくびをすると
ほわわとあくびを返してくれる。

ぼっちがぱしばしまばたきすれば
ぱちりぱちりと返ってくる。

ぼっちはまた不思議そうに首をひねって うんうん悩む。

(僕はぼっちなのに、ぜんぜんぼっちじゃない)

そう思ったとたん ぼっちは急に、自分がウソツキになったような気がして
すいとひとりで夜空をおよぎにいつてしまった。

ぼっちの耳は 星がかちかち音をたててぶつかるのや
ざあざあ流れる夜の音 走ってくる流れ星の吐息ばかり集めた。

(ぼっち、ぼっち)

ときどきそんな音たちにもまれるようにして 懐かしい声もきこえた気がしたけれど
ぼっちはまたきょとりととぼけ顔で ばしゃんと深くにもぐっていくのだ。

夜の底には星はなかった。

月ですら、こんな暗い世界のことは知り得ないだろうとぼっちは思った。
ぼっちは小さくまるくなって 耳をすます。

(なあんにも きこえない)

きんきんも、ざあざあも。
ぼっち、と呼んでくれる声も。

ぼっちはふわとあくびを試みる。
それからぱしぱしまばたきをした。

(なあんにも 返ってこない)

ぼっちは小さくふふふとわらって。

ねじくれた時にどこかへ飛んでいってしまったらしい、やわらかな自分の欠片を
きっと夢の中でみつけてやろうと 目をとじた。

おわり。

天の川の捨て子

<http://p.booklog.jp/book/104951>

著者：風宮 凧

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kazemiyanagi/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/104951>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/104951>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ